失われたものの守護者

舞衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
失われたものの守護者

【Ｎコード】
Ｎ３８０７Ｋ

【作者名】
舞衣

【あらすじ】
とある遺跡の調査に来た古代遺跡及び遺産保護役員の少女は、トレジャーハンターの青年と出会う。出会ってしまったのが、運のつき。方や守る者、方や奪う物。反発は耐えません。さてさて彼らの行く先はどうなるのでしょうか。彼らが生きるのは一度は滅んだ世界。多くの機械が遺物となり、遺産となった世界。

報告書1 - 不審人物との遭遇

薄暗い建物の中を一人進む者がいる。
その人物は少し震えながら、壁に手をつきゆっくりと進む。
しばらくそうして進んでいると、遠くに外からの光が沢山入る穴がある。建物の出口らしい。
安心したのか、大きく息を吐いた。

「やっと出口だぁ」

嬉しそうに顔に笑みを浮かべ、少しかけあし駆け足で光の射す方に向かう。
しかし、その出口は願っていたものとは違っていた。
薄暗く狭い通路から出ると、広い庭園が広がっている。
庭園は建物の中に作られており、天井はガラスで覆われている。
そこから、外の光が降り注いでいた。
その光景を見た瞬間、出口を探していた人物、ヴィエラは、膝を折り地面に座り込む。そして呆然と、それこそ突きつけられた現実を拒否するように大きく目を開いて目の前の光景を見る。

「そんな。・・・どうしよう、もう五時間も経っちゃったのに」

首に下げていた懐中時計を見て呟く。懐中時計の短い針は、八を指している。此処に着いたのは正午だったから、今は午後の八時ということになる。皆心配しているだろうと思いながらも、出口を探すため歩き通しだったため疲れが蓄積しており、立つ気力もない。
先ほどやっと出られるという希望も打ち砕かれたのだ、尚更である。
だが、ずっと呆けている訳にもいかない。

とりあえずポーチの中に入っていた簡易食を取り出し栄養を補給する。
もごもごと食べながら今後のことを考える。
もうこんな時間になってしまったのだ、他の人たちはすでに一旦キャンプ地に帰っているだろう。リードはきちんと持っているから、私が居る所は分かっているはずだ。
問題は、どうやって私がいる所に辿り着くかだ。

「ずいぶん長い間滑り落ちたからなぁ」

約五時間前の出来事を思い返す。
自分たちは遺跡調査のためにここに来ていた。
しかし、調べている時にうっかりと隠し扉を開いてしまった。
そのまま扉の内側に倒れてしまったのだ。
更に運の悪いことに内側は滑り台の様になっていた。そのままずるずると落ちて行く時、自分が入った扉が段々と閉まっていき周りが暗くなっていった。
その瞬間に絶望が襲ってきて血の気が下がった。
何故ならこうゆうものはたいてい脱出通路を目的として作られている。ということは、敵が追いかけてこれないよう、簡単にはあの扉を開くことが出来ない筈。つまり、仲間が自分をそこから助けに来ることはほぼ不可能ということなのである。
ああ、自分の間抜けさに腹が立つ。
簡易食を食べ終わり、幾らか回復した体力を使って出口探しを再び始める為立ち上がる。
座った時に付いた土や草を払ってから大きく伸びをして気合いを入れる。

「よっし。がんばろう」

先ほど座った時に手放した懐中電灯を拾って歩き出す。
ガサガサと長い年月の間に伸びた草むらの中を進んでゆく。
最初は何があるか分からないので慎重に進んでいたのだが、既に心身ともに疲労している。
そんな状態で集中力が続くはずもなく、見事、大きな『何か』につまずき草むらに顔から突っ込んでしまった。
草がクッションの役割をしてくれたおかげで傷をつけることはなかったが、痛みで涙が浮かんできた。
ぶつけた鼻を擦りながらつまずいた『何か』を見るため振り返る。
初めはそれが何だかわからなかったが、その物体が何だが理解した瞬間思わず叫びそうになった。
咄嗟にそれはまずいと思い、自分の口を手で押さえて叫び声を飲み込む。
そして、恐る恐る『それ』の顔を覗き込む。
ヴィエラがつまずいたものは、青年だった。
つまづかれたのに何故か青年は起き上がることはなく、仰向けで心地よさそうに眠っている。
最初の衝撃が過ぎると目の前のもの（主にその図太い神経に対して）に興味がわき、ヴィエラは青年のことを凝視する。
『ここに住んでいる』という可能性はないだろう。
一緒に来ていた調査員の一人でもない。
となると・・・

「もしかして泥棒・・・？」

ぼそっと呟く。

「いや、泥棒じゃない。トレジャーハンターだ」

「トレジャーハンターも泥棒と同じじゃない・・・って」

普通に返事をしてしまったが、ちょっとまて。ここには二人しかいないわけで、自分以外の声が聞こえたということは・・・。
一度固まった思考を急いでフル回転させる。

「おーい、どうかしたのか？」

うるさいな。考え事してるんだから静かにしてよ。

「硬直してるのはいいが、このままっていうのもな」

そう言うと、青年はよっと勢いをつけて立ち上がった。
服に付いた草を払い落し、体をほぐす為、手を組んで伸びをする。

「うっし。しっかり休んだし、出口探しに行くぞ」

青年はそう言うと、まだ座ったままのヴィエラに手を差し出した。
差し出された手をヴィエラは不思議そうに見つめる。

「ほら、君も」

その言葉に差し出された手の意味を理解したヴィエラは、青年の手のひらに自分の手を重ねた。
重ねたあと、はっと気づく。
なに素直に泥棒（かもしれない人）の助けを借りているのだろう、と。
青年はそんな混乱しているヴィエラを勢いよく引っ張る。

「わっ」

いきなり引っ張られたヴィエラは驚きの声を上げた。
踏ん張ることが出来ず、そのまま勢いよく前にいる青年にぶつかる。

「おっと」

青年はヴィエラを受け止めると、よいしょと幼子を持ち上げるように彼女を立たせた。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして、まあ俺がいきなり引っ張ったのがいけないわけだし」

転びそうになったことが恥ずかしかったのか、少し紅くなった顔を不機嫌そうに膨らませながら受け止めてくれたことに礼を言う。
礼を言うにはふさわしくない不貞腐れた顔をヴィエラはしていたが、青年は特に気にした風もなく出口を探す為に当たりを見回した。

「さて、と。じゃ、こっちに行くか」

青年はそう言い放つとヴィエラを置いて壁のほうに向かっていった。

「え？そっちは壁じゃ・・・」

困惑しているヴィエラをよそに、青年は壁を調べ始める。

「あ、ここかな？」

そう言うと荷物から何やら変な物を取り出し、壁に貼り付けた。

「ちょっ、あんた、それって！」

その『何か』が何なのか気付いたヴィエラは血の気が引いた。
そのせいで初対面の人相手に「あんた」という不適切な言葉を使ってしまったわけだが、それほど彼女を慌てさせる品物を彼はどこからともなく取り出し使おうとしているのである。

「セット完了。じゃ、逃げるぞ」

その後の青年の行動は驚くほど速く、驚きで突っ立ったままでいるヴィエラの手をつかんで壁から距離をとる。
十メートル程離れた所まで行くと先ほどの『何か』が……爆発した。

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

爆発とともに爆風がヴィエラ達に襲い掛かり、二人は軽く吹っ飛んだ。

「いてて。大丈夫か？あんた」

「だいじょばない…思いっきり尻打った」

ヴィエラは青年の両腕に頭を守られる様にして抱きかかえられていた。
頭を打つことはなかったが、地面にぶつかった衝撃で強か尻を打った。痛みで涙がにじみ出る。
が、そんなことにかまっていられない。

「てか、あんたあぁぁぁ！あんなものをこんなところで使うなんて正気かあぁぁぁぁぁぁ！」

ヴィエラは力の限り叫び、青年の襟首をつかんで物凄い勢いで前後に揺すった。

「あんた、自分が何使ったかわかってんの！」

「え？うん。レベルCの小型水素爆弾だけど」

青年はいきり立っているヴィエラを不思議そうに見ながら平然と答える。

それを見て更にヴィエラの頭に血が上る。

「あぁんたはぁあああ！そんな強力なものこんな古い遺跡内で使って、壊したところがやばかったら崩れて生き埋めになるでしょうが！もうちょっと考えてそうゆうもんを使え！」

大声で叫んだせいか、少し酸素不足になり肩でゼイゼイと息を吸う。

あんなに怒鳴られたにもかかわらず、青年の表情は穏やかであった。

「大丈夫だよ。ここはあんなものじゃ壊れない」

どこか確信をもった、それまでのふわふわと頼りない物言いでなく力強い声音で青年は言った。

「え？」

その変化にヴィエラは青年がこの遺跡について何か知っているのではないのかと思った。…が、

「まぁ、トレジャーハンターの勘だけどな！」

青年は元気よく、爽やかな笑顔と共にヴィエラに向かってグッと親指を立てた。

「あほかぁぁぁぁぁあああああああああ！！」

さわやかな青年の笑顔を見た瞬間、己の精神の何かが切れた。その瞬間、己の体で出せる限りの力を振り絞り、ヴィエラは青年に回し蹴りを喰らわせた。

報告書2 - 不機嫌な少女

その後、ヴィエラにこってり怒られた青年に、彼女は持っているすべての遺産を出すことを要求した。
「これで全部だよ」
そういう青年の前は、遺産によって小さい山が出来上がっていた。
「どこにこんなに持っていたのよ、あんた」
「え？見ていた通りだよ？」
きょとんと自分を見つる彼を見て、ただでさえほとんど残っていなかった気力をごっそり何かに持っていかれた気がした。
ヴィエラは、深いため息をつく。
「まあ、『どこに持っていたか』なんて問題じゃないわね。『どこから入手したのか』が問題だわ。…私でさえこんなにたくさんの遺産見たことないのに」
「それは俺が凄腕のトレジャーハンターだからだよ」
自信満々、意気揚々、俺に不可能はないぜ！とでもいいそうな良い笑顔を浮かべた。
少しの間。
再びブチ切れそうになったヴィエラは己に怒りを鎮めろと言い聞かせながら自分の役割を思い出す。
「貴方がトレジャーハンターであっても、これほどの遺物を保持するのは法律に反するわ。これらは私が引き取ります」
冷静になろうと己を抑えているヴィエラをにやにや笑いながら観察している青年は口を開く。
「それはいいけど、これだけの遺産ここから運び出すのは君だけじゃ無理じゃないかな」
小馬鹿にしたようにヴィエラは青年を鼻で笑う。
「はっ、残念でした。ここに調査に来ているのは私だけじゃないの。外のキャンプ地に中隊が待機しているのよ」

「じゃあ、なんで君は一人でここにいるのかな」
にこやかに聞いてくる青年の言葉に、ヴィエラはグッと言葉が詰まった。
「それに、今ここで俺が君をどうにかして黙らせてとんずらしてしまう事も出来る。君がここで、敵に対して自分が保護役員である事をバラさない方が、仕事…やりやすかったと思うよ？」
そう告げる彼の表情は、どこまでも爽やかでにこやかであった。気持ち悪いほどに。
「ご親切に忠告ありがとうございます」
無償所になったヴィエラはお礼を言う。それのどこが可笑しかったのか、青年は笑った。
「ははっ、そんなに拗ねないで。でも驚いた。君は保護役員なんだね」
国家機関である古代遺跡及び遺産保護委員会の役人になる為には、非常に難しい試験を受けなければならない。その為、大抵二十代後半でようやくその資格を取る人がほとんどだ。どう見ても十代後半に見えるヴィエラの様な少女が就ける役職ではない。
「まあ、それは置いといて。せっかく壁に穴開けて道作ったんだから先に進まない？このままずっとここにいるわけにもいかないし。大丈夫、遺産はちゃんと君たちに渡すから」
まだ青年に対して警戒しているヴィエラは素直に彼の提案を受け入れられない。
確かに彼が開けた壁の先に通路がある。
「そうね、待っているだけじゃ始まらないし。…その前にこの大量の遺産、どうしよう」
「置いていこうか。しまうのも面倒だし」
さらりと言う持ち主の言葉に、ヴィエラは驚く。遺産を、しかもほとんどがレベルC以上の物をなんの置いていこうと言う人はいないだろう。何故なら、今の技術ではレベルCどころかレベルDの遺産さえ満足に作る事が出来ない。つまり、これらの遺産は消費され

る一方だ。だが、目の前の青年はそれらを置いていこうと言うのである。しかも理由が面倒だからなんて。ヴィエラは目眩がした。
「後で君の仲間に取りに来てもらうから大丈夫だよ」
彼女の心中を推し量ったのか、青年が告げる。
「そういえばまだ名乗って無かったね。俺はシン。よろしく」
ニコニコと笑っている青年に、名乗る気がなかったヴィエラだが、自分が名乗るのを待っているのだろう、いっこうに青年は動こうとしない。
仕方なく、ヴィエラは自己紹介をする。
「ヴィエラ、ヴィエラ・リーニよ」
「よろしくヴィエラ。そんじゃ、行きますか」
先程爆破して開けた穴に向けて歩きだしたシンを見ながら、ヴィエラは溜息を吐いた。彼は自分の事をトレジャーハンターだと言った。ならば、こうも簡単に遺産を手放すだろうか。それとも、彼が特殊なのか。考えてもらちが明かない。とりあえずヴィエラは今の手持ちの物を使い、置いていく遺産が他の保護役員以外の人に持っていかれないよう細工を施し、シンのいる方へ向かった。
ヴィエラが行くと、シンが崩れた瓦礫を踏み越えながら先に続いている通路へと入ったところだった。彼に続いてヴィエラも瓦礫を踏み越え、通路に入る。周りを見渡してみると、どうやら先程居た施設とは建設に使われているものが違っているのがはっきりとわかる。先程居た施設はレンガを主に使っていたが、ここは一面冷たい金属の様なものでコーティングされている。この差に、ヴィエラは違和感を覚えた。
「ここ、何かの研究所かしら」
以前調査に行った遺跡がここと同じような作りをしており、そこは研究施設だと、調査の結果判明した。なので、今回もそうだと思ったのだ。
「研究所は研究所でも、ここはちょっときな臭いとこだったのかも」
そう呟いて右手に続いている通路の先に、シンは進んだ。ヴィエ

ラは彼の後に着いて行くが、彼の言葉によってこの通路に入ったときに感じた違和感の理由が分かった。
「あ、ここ気をつけてね」
シンが注意を促したところを見てみると、ヴィエラぐらいの体格の人がすっぽり入ってしまうぐらいの穴が開いていた。彼が注意していなければ、自分の考えをまとめるために集中していたヴィエラは、その穴にはまっていただろう。その事に気付き、ヴィエラは肝を冷やした。2、3歩ずれて穴を避ける。
取り合えず、考える前に周囲に注意して先へ進まなければ自分の身が危ない。数時間前に仕掛けにはまってしまったのを思い出して、深い溜息を吐いた。
「あ、君疲れた？俺と違って何時間も歩いたみたいだし、疲れたまってるよねぇ。少し休もうか？」
シンはヴィエラの溜息の理由を疲れと判断したため、気を使ってそう言ったのだろうが、その気遣いが逆にヴィエラには不愉快だった。
「ご心配なく。先程、貴方に出会う前、十分に休息をとりましたから、疲れていません」
半分は強がりだが、人に心配されるほど疲れを感じているわけでもない。
それよりも、ヴィエラは早く仲間と合流したかった。

報告書3 - うっかり少女

無言のまま二人は先へと進んでいった。その一番の原因は、ヴィエラの機嫌の悪さが原因である。不満、不機嫌の態度を彼女は隠そうともしなかった。それを咎めるほどシンは彼女の態度に不快感を覚えなかった。なので、彼は触らぬ神に祟り無しと、彼女を放置していた。

不機嫌ダダ漏れのヴィエラと、そんな彼女もなんのその、己のペースを崩さず強引にＭｙ　ｗａｙを突き進むシン。そんな2人は爆破した場所から黙々と足を進めて行った。その状態で４０分程先に進んだ所で、彼らの目の前に大きな扉が現れた。

「うーん、原動力が無いから開かないか。ということは」

ブツブツと呟きながら扉の右側に立ち、シンは何やら作業をしている。

その作業をヴィエラは唯静かに観察していた。

実は、ここに来るまでにも数か所同じように閉じている扉が、彼らの行く手を阻んでいた。

そしてそれらをこじ開けたのは、彼女の目の前で何やらごそごそ作業している奴である。

彼が所有していた遺物は全て取り上げたはずだが、隠し持っていたのだろうかとヴィエラは疑った。なので、彼に使った道具を見せるよう要求した。すると、これまたあっさりと彼が差し出したのは、唯の工具だった。

どうやったらあんなでかい扉を、このような工具で開ける事が出来たのかは不思議だ。

まあ、トレジャーハンターを生業としている程だ。きっと自分が知らないような技術があるのだろうと自分を納得させた。

本部に帰ったら、それらについての資料が無いか調べよう。と、ヴィエラは心に決めたのだった。

「うっし！開いた」

彼女が帰った後の予定を考えているうちに、シンの作業が終わったらしい。

組んでいた腕を解き、ヴィエラは扉へ向かう。

どうやら今度は通路ではなく部屋に続いていたようだ。遺物である、多くの機械が所狭しと置いてある。

その状況をみたヴィエラは目を輝かせた。

「すごい。こんなに多くの機器があるところが存在するなんて、保管庫以外無いと思ってた」

「あれ？君たちがこの施設の調査に来たってことは、ここにこれらがある事知っているんだと思ってたんだけど」

ヴィエラの呟きが聞こえたシンは、疑問を覚えた。確かに彼女ら保護役員の仕事は遺物や遺跡を含めた遺産の保護である。なのに、その保護役員のメンバーであるヴィエラが何故驚いているのだろうか。

「わかった！君雑用係りなのか！！」

納得！といったようにシンは掌に握り拳をぽんと置く。その言葉を聞いたヴィエラの怒りのメーターは振り切った。

「失礼な！私は保護役員”ツヴァイ”の称号を持っているんです。それに、今回の目的の遺物は機械ではなくデータとしか」

言ってしまった瞬間、ヴィエラは「しまった」と思った。

「あ～あ。俺だから良かったものの、そんな事他の人に言っちゃだめだよ？危ないから」

忠告してくるシンに、ヴィエラは目を点にした。

トレジャーハンターを仮にも自称しているのに、彼は自分がツヴァイだと知っても動じない。むしろこちらの身の心配までしているではないか。

なんだろう。この、失態を犯したせいだと言い切れない疲労感は。

「ご忠告ありがとうございます」

ヴィエラの返事にうんうんと満足そうにシンは肯く。彼のその姿をじっと見つめるヴィエラは、身体の中に溜まった重石を吐き出す様に、大きく溜息を吐いた。

ツヴァイといっても、ヴィエラはまだ新米のペーペーだ。本来は絶対に漏らしてはいけない情報を話してしまった事で、きっと彼も確信しただろう。彼女が自分の脅威とならない相手だという事に。

「さてと、どうやらここがこの施設の情報等の中核部だったみたいだね。調べれば貴重なものがあるかな」

「ちょっと！待ちなさいよ」

報告書4 - トレジャーハンター

勝手に触ろうとするシンを抑え、ヴィエラは手袋を着け作業を開始した。触る前に専門のカメラで機械の状態を記録してから、機械が動くかどうか確認する為に機械に触る。

「動くかな」

これまでの道のりで、この施設に動力が残っているとは思えないが、試してみない事には分からない。少ない望みを持って、主電源らしきボタンを押す。

「やっぱりつかないか」

押して少し待っても機械は動かぬモノのままであった。思わず緊張で強張った身体から力を抜く。

「ねえ、これってもしかしてサブの動力起動スイッチじゃない？」

部屋の隅を見ていたシンが何やら見つけたらしい。その声に反応したヴィエラが止める前に、シンはスイッチをポチリと押してしまった。

ブンッという重たい音が鳴り、それまで全く反応が無かったモノが息を吹き返した。

「動いた・・・」

ヴィエラは息を吹き返した機械に目を奪われた。光輝く彼らは、何と美しいのだろう。

視線を感じたヴィエラがシンの方に目線を向けると、彼は笑っていた。

「何？」

さっきの嬉しそうな表情から一変し、不機嫌な声音で問う。

「ん？何って何？」

問い返してきた彼にヴィエラは一瞬顔を歪めたが、何も言わず作業を開始した。真剣な表情で作業に当たるヴィエラを見ながら、シンは静かに佇むだけだった。

取り敢えず、ここの施設の地図の検索をかけるが、データが壊れかけている為か、うまく動いてくれない。

「ごめんね。早く本体と合流して保護してもらうから」

機械をゆっくりと優しく撫でるその仕草は、慈愛に満ちていた。

「うーん、流石にデータが古くなってところどころ破損してるな」

何時の間にかヴィエラの直ぐ側にシンが来ていた。その事に気付かなかったヴィエラは驚く。

「ひぎゃぁあ！」

彼女の悲鳴にシンは目を丸くして驚いた。

「え？！何？」

何故彼女が悲鳴を上げたのか分からないシンは、慌てる。

「い、いきなり近づかないでよ！…びっくりしたぁ。てか、勝手に動くなって言わなかった？」

不快そうな表情をする彼女に、敵意が無い事を表すように、シンは両手を頭の位置まで持ち上げる。

「大丈夫、君たちの不利益となるような事はしないよ。俺は心優しい遺物を大事にする善良なトレジャーハンターだから」

彼はそう宣言するが、ヴィエラは未だ疑り深く見つめる。

「あ、信じてないな！あのね、トレジャーハンターで、俺はそこらの泥棒と違うの！さっきも言ったでしょ？大戦以前はトレジャーハンターも唯の盗掘者だけと、委員会が出来てから俺らはきちんと認められた遺物保護役員だ。唯ちょっと過激なのが、多いけど」

そうなのである。トレジャーハンターはヴィエラが所属している委員会の一員に含まれているのだ。　一応、ではあるが。

「でも、貴方達は泥棒と変わらない。遺跡を壊し、強引に遺物を集める貴方達は」

彼らの行動は過激である。その役割は遺物を回収するのを目的とし、その際に遺構を破壊してしまう事も多々あるのである。その為、遺跡を保存することを仕事としている保護役員との対立が絶えない。一方的に保護役員の方が彼らに噛みついているのがもっぱらなのだが。

「ここで君たちと争うのは得策じゃない。ここはお互い協力した方が良いんじゃないかな？」

じっと見つめながらヴィエラは考える。確かに一人より二人の方が効率も良い。

背に腹は代えられない、と彼女は決断した。

「分かった、協力をお願いするわ。但し、遺物や遺構を破壊しようものなら容赦しないから」

きつく睨みつけると、シンは笑顔で肯いた。

「ああ、十分気をつけるよ」

報告書5－データコピー中の出来事（1）

ヴィエラに宣言したとおりに、シンは大人しく彼女の作業の手伝いを始めた。最初は疑い大半で彼の行動に注意していたヴィエラも、自然と自分の作業に集中し始めた。

とりあえず残っているデータを保存するために、持ってきていた記録媒体に移す作業を行う。しかし、断片的にしか残っていないといってもその量は膨大であり、全てをそれに移すことは不可能であった。特に破損がひどい情報を中心に記録媒体へ移していく。

移すデータを選別し、ダウンロードを開始する。

「ふう、後はいったん戻らないと」

無事に作業が終わりそうだと安心したとき、シンが自分たちが入ってきた扉の方をじっと見つめていることに気がついた。

「どうしたの？」

不思議に思ったヴィエラが問う。しかし、シンはヴィエラの方を見ずに厳しい眼差しで暗い扉の向こうを見続ける。

「誰か、こちらに向かってきているみたいだ」

それがどうかしたのだろうかとヴィエラは首を傾げた。彼女はこちらに向かっている人物が仲間の保護役員だと思っているのでシンが警戒している意味がわからないのだ。しかし、彼には自分の仲間が外にいることを伝えたはずだ。

そこで彼女は一つの可能性を思い出した。

最近、ロストテクノロジーに関する事件が数件起こっていた。保

護役員が収集した遺物や遺跡に残っていた遺物を奪われた等の事件である。
もしかしたら、今ここへと向かっているのもその犯人なのでは。
ヴィエラもとりあえずこちらに向かっているという人物を警戒し、護身用の携帯睡眠銃を構える。本来これは獣用なのだが、一応人にもそれなりに害はないらしい。但し、目覚めてから約半日ほど副作用のため痺れて動けないらしい。笑顔でそう告げた研究員を思い出し、悪寒が背中を滑り落ちて行った。…使う状況にならないことを祈ろう。

「下がっていろ」

既に戦闘態勢に入っているのか、シンからピリピリとした雰囲気を感じる。
今の時代大変貴重な遺産を巡り、ならず者や時にはヤバイ組織とごた～いめ～んする場合も少なからずある。その場合大抵一緒に来ている護衛の兵が前に出てヴィエラのような保護役員は盾の中で身を縮こませている。したがって、戦闘経験など皆無なのである。一応護身術を習ってはいるが、それはあくまでも護身であり戦闘向けではないのだ。
なのでヴィエラは大人しくシンの言うことを聞いて数歩下がる。
シンの目線が向かう先をヴィエラも追い、目を凝らす。機械音に交じって高い足音が反響して聞こえてくる。ちらりとデータコピーの進行状況を確認するが、まだ3分の1程度しか進んでいない。こちらに向かっている人物が来る前に終わってくれという願いと、どうか自分と同じ保護役員でありますようにという願いがヴィエラの中で駆け巡る。

報告書6－データコピー中の出来事（2）

刻々と音の正体が彼女らが居る場所へと近づいてきている。どうか仲間の保護役員でありますようにと祈りながらも不安は膨れていくばかり。そして更にシンが追い打ちをかける言葉を言う。

「ちょっとやばいかも」

「何が？」

シンの言葉にヴィエラは問いかける。

どこがどのようにヤバいのか教えてもらわないと唯でさえ不安なのに思わず泣きそうになってしまうではないか。そんな心の声を口に出すわけもなく、ヴィエラはシンをにらみつけた。まあ、彼は背を向けているので彼女のその表情を見ることはないが、雰囲気で何となく伝わったのだろう。「あれ？後ろにいる子、ちょっと怒ってるかな」といったことを思いながら口を開く。

「一人だったら何とかなったかもしれないけど、あちらさんはどうやら2人いるみたいだ」

「ほ、保護役員という可能性は」

己の望みを言ってみるが、それはすぐにシンによって否定される。

「いや～、実はこの遺跡に入る前に俺、君の仲間たちに会ってるんだな、これが。その時に朝になっても戻ってこなかったら捜索をお願いしますって言って来たから彼らでない可能性が高いと思うな。アハハハ」

つまり、救助が来ないと今この状況で告げられたヴィエラは、怒りを通り越して諦め始めた。ああ、自分はここでどうなるのだろう。とぼんやり考えたところで、彼女の脳裏に一人の男性の顔が浮かんだ。

優しい表情で自分を見守る、彼の人を思い出し、こんなところで人生終わりになんか出来ないと頬を打つ。

頬を打った音でシンはヴィエラの方に顔を向ける。

そこにはいきなり何してんの？この子、といった表情が浮かんでおり、ヴィエラは不快感を覚える。だが、恐らく他の人がしていたら自分もそういった表情をするだろうと思ったので、そのことに対して不満を言わなかった。

「それが本当なら、ここに向かっている人たちは少なくとも商売敵かもしれないわね」

「そうだね。過激な人たちじゃないと良いね。ついでに程よく頭が足りてないとなお良し」

緊張状態の中で、笑顔をその顔に浮かべながらひどいことをいう目の前の男を、ヴィエラは冷めた目で見た。

「さて、来訪者方のお出ましだ」

シンがそう言った時にコピーの進行状況を確認してみると、漸く半分をいったところであった。早く終わってくれとヴィエラは祈るが、その前にシンの言うところの来訪者が彼女たちの目の前に現れた。来訪者は男性2人で、お面を付け表情を隠している。

見るからして不審な人物の登場に、ヴィエラは顔をしかめた。

少しの間お互い見つめあっていた。そして来訪者の一人、シンと

同じくらいの背丈の細身の青年が口を開く。

「ダイド、何故ここに人がいる」

青年の問いにもう一人の大柄な男性が腕を組み、シンとヴィエラを見つめる。

「入る前に保護役員の野営地を見つけただろう。きっと彼らも保護役員だ。どうして今ここにいるのかは、理解不能だが」

それはそうだろう、自分たちもまさかこんな時間にこんな所でこんな人たちと遭遇するなど全く予想もしていなかった。と、ヴィエラは毒づく。けっ。

「まあ、俺たちは任務を遂行するだけだ。邪魔立てするなら排除する」

疑問に思ったことすら時間の無駄だったと言いたげに、青年が頭を振った。その行為にヴィエラは苛立ちを覚える。

「さっきから勝手な事ばかり言っているけど、貴方達は何者ですか！」

シンの後ろからまるで猫が威嚇するように噛みつくヴィエラ。そのような状況で言われても全く迫力が無い。

苦笑しながらそれを見ていたシンは気を取り直して、彼らに向かって言う。

「君たちは何をしにここに来たのかな？」

シンの問いに、ダイドと呼ばれた男性が答える。
「俺たちはここにあるモノを取りに来た。邪魔しないで頂きたい」
丁寧な口調で対応する巨漢の男に再びヴィエラがくってかかる。
「ふざけないで。貴方達は保護役員でない一般の人でしょ。遺物の扱いを知らない人に貴重な遺産を預けられるはずがない」
彼女の発言に呆れながらも、シンは彼らに隙を与えないように注意する。
「ま、そう言うわけだから。諦めて帰っていただけませんかね」
にへらと笑ってその場を収めようとするシンに対してヴィエラは鉄拳を食らわせた。
「ぐふっ」
「何笑ってるの！緊張感持ちなさいよ、ホント信じらんない！！」
行き成り入った脇腹への鉄拳に、シンは一瞬息が詰まった。
彼らのやり取りを興味なさそうに見ていた青年は、おもむろにダイドの方を向き爆弾を落とす。
「なあ、あの女うざい。さっさと片付けて終わらせよう」
その言葉にヴィエラの顔に血が上り真っ赤になり、シンは噴き出さないように顔に力を入れた。
ダイドは表情が仮面で隠れているので詳細には分からないが、呆

れているような雰囲気をかもし出している。

報告書7 ―データコピー中の出来事（3）

「まあいい。時間がもったいない、さっさと済ませて帰ろう」

そう言うと、青年は腰にさしていた刀を鞘から抜き、床を蹴った。一気にシンとの距離を縮め、左下から右に向かって上へと切り上げる。

それを最小限の動きでシンが避け、彼の後ろにいたヴィエラが睡眠銃を撃った。最初の一発が青年の腕をかすめ、その後の数発は壁や床に着弾した。銃を撃ってきたヴィエラに目もくれず、青年はシンに向かって再び攻撃を仕掛ける。シンと青年の位置が絶えず変わり、ヘタに打つとシンに当たってしまうためヴィエラは銃を撃って援護することが出来ない。彼女は舌打ちをする。

青年にシンが負けないよう心の中で祈りながら、もう一人の方へ視線を向ける。ダイドはヴィエラや青年とシンの戦いなどないかのように、堂々と部屋の仲を歩いていた。

何をするつもりだと観察していたが、彼らの会話を思い出した。侵入者たちは何かを探している。それはきっと遺産であり。わざわざこの様な所に来るほどのモノである。貴重な遺産を不審人物たちに渡すわけにはいかない。

ヴィエラはしんと青年の戦いを避けながら、ダイドの前に立ち、銃口を向けた。

「止まりなさい」

ヴィエラの言葉にダイドは素直に立ち止まった。

「大事な遺産を不審者に渡すわけにはいきません。私達以外にも人が居ます。ここで抵抗しても無意味です。大人しく降伏して下さい」

「君達に私達の行動を妨害する権利はない。怪我をしたくなければそこを退け」

少しの間をおいてダイドから出てきた言葉は、ヴィエラの警告を受け入れるものではなかった。

「私は保護役員です。人々の歴史と文化を正しく伝える義務と権利があります」

「そんなことはどうでもいい。怪我をしたくなければそこを退け」

再び警告してくるダイドにヴィエラは怯みそうになるが、気力で耐える。

「退きません！貴方の方こそ！」

次の瞬間、ヴィエラはダイドの足元に銃弾を撃ってしまう。響き渡る発砲の音に、ヴィエラは呆然とした。本当に撃つ気はなかったが、極度の緊張のために彼女は引き金を引いてしまった。

撃ってしまったヴィエラは頭から血が引いていき、今にも倒れそうになっている。だが、ダイドは銃弾が当たった地面を見ることもせずにヴィエラを見続ける。

「残念だ」

そう呟いた瞬間にダイドはヴィエラに向かって歩き出す。ヴィエラは覚悟を決めた。動きを止めるためにヴィエラは銃を構えてダインに向かって撃つが、それが彼に当たることはなかった。

ダイドはその体格からは想像できないような俊敏さで睡眠銃の弾

を避け、そのままヴィエラの後方へと走る。阻止しようと何発か銃を撃つが、ダイドの動きが早過ぎて全く当たらない。舌打ちをしてヴィエラは銃を撃つのを止めて、銃口を上に向ける。
少し離れた所に男は立ち、静かにヴィエラを見つめる。そして次の瞬間、一気にヴィエラよの距離をつめ、彼女の腹に拳を打ち込まれる。行き成りの反撃を避けられず、ヴィエラは血の気が引いた。
やばいと思って目を瞑ったが、予想していた痛みは無く、誰かの腕に腹を抱えられ後方に引っ張られた。

「危ない、危ない」

ヴィエラを助けたのは、青年と戦っていたはずのシンだった。

「ちょ、ちょっと離して！」

「はいはいよー」

変な返答とともに、ぼとりと落とされたヴィエラはきちんと地面に足がついていなかったため、地面へ落下した。受け身を取れなかったヴィエラは痛みでもだえる。この野郎、とシンを睨みつけるが彼はヴィエラの方ではなく正面へ厳しい視線を向けている。
先程までと場の雰囲気が変わっている事にヴィエラは気づき、何が起こるのか不安を覚えながら痛みを堪えて立ち上がる。

「これ以上時間を掛けられない」

いつの間にか青年がダイドの隣に立っている。

「ダイド、俺があいつらを抑えている間にさっさと仕事を終わらせろ」

それだけ言うと、青年は地を蹴った。

報告書８－データコピー中の出来事（４）

シンの方へ攻撃を仕掛けるのかと思っていたが、何故か青年はヴィエラの方に向かって来る。反応しきれないヴィエラを再び持ち上げて、シンが後退する。

「あらら、あんた狙われてるね」

「か、軽く言わないで！」

ヴィエラが狙われた。それは、ヴィエラを攻撃すればシンが助けに入る。つまりヴィエラの存在はシンの足を引っ張ると認識された事を意味する。その事実にヴィエラは悔しくなる。

青年の攻撃から逃げつつ、シンはヴィエラの表情をちらりと見た。

「まあ、仕方ないね。そいじゃ、死なないよう頑張りましょうか」

再び軽く答えると、彼はヴィエラを抱えたまま身軽にあっちへこっちへと移動する。人一人抱えているとは思えない動きで、シンは敵を翻弄する。

「ちょこまかと動きやがって」

青年は小さく悪態を吐き、シンを追いかけていた足を止めた。

追いかけられるのが止まったので、シンも足を止め、青年を観察する。何をするのだろうかと警戒していると、青年が何かを呟いた。小さすぎて何を言っているのかヴィエラには分からなかったが、青年が言い終えた瞬間、ヴィエラを抱えているシンの力が強まった。

どうしたのだろうかとシンを見上げると、先程までの現状にそぐわない表情ではなく、何かとんでもないものに遭遇したようなものになっている。その変化にヴィエラはまさにぽかんという擬音がふさわしいなんとも間抜けな表情を浮かべた。

「シン？」

ヴィエラの問いかけに、シンの意識が一瞬青年から彼女へと移る。その瞬間、青年は一気にシンとヴィエラに向かって突き進んできた。

ヴィエラの方に意識が向いていたシンは一瞬反応が遅れた。

咄嗟に後ろの方へ飛んで青年の斬撃を避けるが、少し反応が遅かった。青年の剣がシンの腕を切り裂き、シンの血がヴィエラの顔についた。

「しくじったな」

視線を青年に定めたまま、シンは自分の失態に苦笑する。

「さて、これからどうしようかな」

腕を切られただけでは状況は変わらないといった感じにシンは不意を突かれる前の状態にさっさと戻ってしまった。

青年の攻撃が当たらない程度の距離を保ちつつ、相手の動きを窺う。シンの予想では立て続けに攻撃が仕掛けられてくると思っていたが、予想に反して青年は動かない。

この隙に逃げてしまおうかとシンは思ったが、何やらヴィエラの様子がおかしい事に気づいた。抱えている身体が震えており、顔の前に両手を持ってきている。どうしたのだろうかと青年に意識を向けながらヴィエラの顔を覗き込むと、彼女は眼を大きく見開き焦点が合っていない。明らかに正常じゃない彼女の状態に、シンは危機

感を覚えた。
今状態のヴィエラを抱えたままでの戦闘は避けた方が良いだろうと判断したシンは、この場から撤退する事を決断した。運よくシンたちの後ろに出口がある位置に立っているのでこの部屋から出る事は簡単だろう。だが、記憶媒体を置いて行ってしまっては敵に持って行かれてしまうかもしれない。
それだけは避けたいなぁ、などと思いながらシンは対策を立てる。
青年を警戒しながら様子のおかしいヴィエラをそっと地面に置いて、彼女を囲むようにに金属の棒を3つ置く。するとヴィエラを包むように金属の壁が出現した。
これで準備万端とシンは満足げに頷き、改めて青年と向き合う。

「何故、最初から使わない」

青年の言葉にシンは笑顔で答える。

「使ったら後でボコボコにされそうだからね。今は緊急事態、仕方ない」

そう言いながらシンは腰に付けていた愛用の棍棒を手にとって構えをとる。

「そんな武器で俺に挑むのか」

「見た目は頼りなさそうですが、昔の人はこれで犯罪者を取り締まってたから、なめてかかると痛い目見るよ～」

軽く手首を回して具合を確かめる。対人の戦闘は久しく行っていないが、まあ大丈夫だろう。
少しの間を置いて、二人は同時に走り出した。

青年の正面へ向かっていき、青年が攻撃を仕掛けて来たところでシンは左へ移動し、青年の攻撃を避ける。そのまま記憶媒体を差している方へ飛び、すばやくそれを抜く。それを懐に入れ、代わりに手のひらサイズの物を取り出す。

再び向かって来る青年を避け、取り出した物を床に向けて投げる。すると閃光と耳鳴りの様な高音の音が響き渡った。

青年が怯んだ隙に、シンは青年の所まで行き彼の頭に蹴りを入れようとするが、寸での所でかわされる。そのまま先程の蹴りの力を利用して第二陣を繰り出す。今度は青年の腰に当たり、青年が吹っ飛んだ。すぐさま態勢を立て直したが、シンの行動の方が早かった。

ヴィエラの所まで素早く戻り、彼女を守っていた物を外す。まだ正気に戻っていないヴィエラを抱えてシンは一目散にその場から逃げだした。

報告書９ー帰還

戦闘から離脱したシンは追手を警戒しながら撤退したが、あの青年達が追いかけてくる気配はない。彼らにこちらを追う意思は無いのだろうと判断したシンは、目的地を変更し歩みを進める。目的の場所に来たシンは瓦礫で閉じかけた出入り口を器用にくぐる。そのまま部屋の奥にあるパネルを操作し、壁と一体となっていた出口を開ける。そこを通り、暗い通路の中をライトの明りを頼りに進んでいく。

１０分程進むと目の前に外の景色が見えて来た。

そのまま建物の外に出たシンは、真っ直ぐに草むらの中を進んでいく。すると遠くに保護役員のキャンプ地が見えて来た。シンはヴィエラを抱え直し、急いでキャンプ地へ向かう。警備兵だろう人がキャンプ地から出て来たのが見え、シンは声をあげた。

「すいませ～ん、ちょっとここの責任者の人呼んできて下さい！それと救護テントありますよね。案内お願いします！！」

警備員は暗闇からやって来たシンに驚いていたが、直ぐに様子のおかしいヴィエラに気づき警戒を解く。

「おい！至急シュピッツェを救護テントまで来るよう伝えに行ってくれ！それと救護員に急患だと連絡を！救護テントはこちらです」

キャンプ地内にいるのだろう仲間に責任者を呼びに行ってもらうよう頼んだ後、警備員はシンの足元をライトで照らしながら案内する。

救護テントはキャンプの中央にある。入口を警備員に開けてもら

うと連絡を受けた救護員が中で既に待機していた。

「ここの隊のツヴァイなんだが、どうも様子がおかしいんだ。見てやってくれ」

そう言ってテント内に設置してあるベットに抱えていたヴィエラを横向きに寝かせる。彼女は今は遺跡にいた時のようではなく、落ち着いているように見えるが、虚ろな表情をし顔色は真っ青である。

「ヴィエラ、しっかりして！」

救護員の1人は知り合いだったのだろう、彼女の名前を呼ぶが反応は無い。

「落ち着け、発作のせいだ。君は彼の傷の手当てを。誰かタオルと湯を持ってきて下さい」

知り合いのこの状態に動揺した救護員に、上司なのであろう救護員が叱咤する。

叱咤された救護員は動揺から立ち直り、名残惜しそうにヴィエラから離れた後、シンに近づいた。

「こちらで手当てします」

シンを椅子に座らせた後、彼に上着を脱いでもらい手当てを始める。無言で手当てを受けていると、外が騒がしくなっていることに気付いた。

何かあったのだろうかと警戒していると、テントの入口が開き、人が入って来た。

「何があった」

入って来た人物はシンを見つけると彼のもとに向かい、彼を見下ろして言った。言われたシンは、その人物の言葉に苦笑した。

「ねぎらいの言葉は無いのかね？君たちが探していた可愛い役員を頑張って連れ帰って来たんだけど」

「彼女が無事に帰って来ていたら言ってただろうな。で、何があった」

「遺跡を調査していたら不審な二人組に遭遇。戦闘になり、逃げて来た。一応施設に残っていたデータを取り出せるだけ取り出してきた。修復を頼む」

手当てが終わり救護員が離れた後、上着から記憶媒体を取り出して渡す。

「奴らはあの遺跡にある何かを取りに来たようだった。あそこには何かある」

「そうだろうな。でなきゃ、こんなに大きな隊を作っての調査なんてしないし、お前も来ないだろう」

「あれ？ばれてました？」

呆れたように言われてシンは笑う。

「彼女を無事に保護してくれてありがとう。お疲れ様。君用にテントを張らせているからそこで休んでくれ。外に待機させている者に

案内させる」

シンの反応を見て溜息１つ吐いた後、用件だけ伝えて彼に救護テントから出るよう促す。だが、シンは立ち上がろうとしない。

「さっきあの救護員が発作と言っていたが、彼女は何故あんな風に？」

ヴィエラを見て尋ねると、言いにくそうにしていたが、それでもシンがじっと相手を見ていると諦めて口を開いた。

「詳しい事を知っているわけではないが、どうも小さい頃目の前で両親を亡くしたらしい。他人の血を見たり体に付着したりするとあのようになってしまう」

事情を聞いた後、シンはヴィエラを見たまま沈黙した。

じっとヴィエラの様子を見ていたシンは、彼女から視線を外し救護テントを出た。

「シン殿ですね、テントまでご案内いたします」

「ああ、宜しく頼む」

テントを出ると、出入り口の両側にある明り近くに立っていた青年に声を掛けられた。どこか疲れた笑みを浮かべてシンは青年に道案内を頼む。

歩き出した青年に続く前に再度救護テントを振り返り、直ぐにはぐれないよう青年の後を歩き始めた。

報告書１０－新たな調査へ（１）

朝日が昇る頃、ヴィエラは目を覚ました。
「ここは」
少し擦れた声で言うと、直ぐ近くにいたのだろう、救護員がミュレアの寝ている寝台へやって来た。
「おはよう、ヴィエラ。気分はどう？」
「マリカ…貴女がここにいるという事は、ここはキャンプの救護テント？」
見知った救護員がいることで自分がいる場所がどこなのか、ヴィエラは覚った。
「ええ、夜のうちにここに運ばれて来たわ。どこか痛い所はある？」
ヴィエラの問いに答えながらマリカは彼女に異常は無いか確認して行く。されるがまま大人しく受けていたヴィエラは首を振った。
「いいえ、特にどこも痛くないわ。それより、私どうやってキャンプ地に帰って来たの？」
「シンという人が発作を起こした貴女を抱えてここまで連れてきてくれたのよ」
「あいつが」
あの遺跡での出来事を思い出そうとする。
確か、破損したデータを記憶媒体に移している最中に侵入者と遭遇し戦闘になったはずだ。
男性２人組で、銃は当たらず自分が標的になったせいでこちらが不利になったとこまでは思い出せる。だが、その後どうやって遺跡を出た？
思い出そうと記憶を辿るが途中で赤い靄の様なものに覆われて思い出せない。無理に靄をかき分けて思い出そうとするが、ヴィエラは耳鳴りと頭痛に襲われた。

「くっ」
苦痛に声をもらし、頭を押さえる。
「こら、発作を起こした時の事を無理に思い出そうとしない」
何度か彼女のこの症状に立ち会ったことのあるマリカはヴィエラを注意する。発作が起こる前や症状が出ている時の事を思い出そうとする度にヴィエラは耳鳴りと頭痛に苦しめられる。
無理に思い出そうとすることによって、身体が拒否反応を起こしているのだ。

そのまま強行してしまえば頭をかきまわされるような痛みによって長時間苦しむこととなる。薬は効かず、休む事もままならない。
医者でも、己でさえもこの痛みを鎮めることは出来ない。
だが、この痛みを鎮める事が来る者が唯一人が、いる。
その人はヴィエラが最も信頼する、最愛の青年だ。彼は王都にある屋敷で彼女の帰りを待っている。
その事を思い出し、ヴィエラは無性に彼に会いたくなった。
会って、いつものように優しい声で大丈夫だと、強く抱きしめて言って欲しい。
泣きそうなるのをぐっと堪え、ヴィエラは青年が今どうしているだろうかと思いを馳せる。そうして段々と思いだそうとした事から意識をそらし、痛みを鎮めるとともに彼女の意識は再び沈んでいった。

再び目を覚ますと、まだ辺りは明るく、それほど時間が経っていないことを覚る。
大量の汗をかいていたようで、着ていた服が肌に張り付いて気持ちが悪い。あの頭痛に襲われ無理やり鎮めようとした後独特の気分の悪さも残っている。
体を洗って身も心もスッキリさせよう。

そう決めたヴィエラは寝台から降り、救護テントに待機している隊員に一言残して外に出た。
外に出て降り注ぐ光に目を細める。
手で顔に当たる光と遮りつつ空を見上げると、太陽が高い位置にあるのを確認した。数秒見つめた後、目線を下に降ろし、目的地へ足を進める。
自分の割り当てられたテントに入り荷物の一部を持って再び外に出る。
ヴィエラは簡易シャワー室へ入って行き、汗を流した。
身支度を整え、簡易シャワー室を出る。荷物をテントに置いたら、遺跡にいるだろう調査部隊と合流しようと思い、彼女はテントへ戻る。だが、その途中で1人の隊員が真っ直ぐ彼女のもとへやって来た。
「いたいた。よう、ヴィエラ。お偉いさんがあんたを呼んでるぞ。会議室に来いだと」
彼女を待っていた隊員は顔見知りで、何度も話したことのある隊員だった。だが、その隊員の名前を、彼女は覚えていない。
「そう、ありがとう」
呼びに来てくれたことに礼を言う。
しかし、隊員は呆れた表情を浮かべた。
「お前さんちゃんと通信機を携帯しておけよ？後で叱られるぞ」
指摘され、ヴィエラは通信機の存在を思い出した。
最近導入された機械で、離れた場所にいる人物と会話出来るものらしい。
小型で持ち運びに便利なのだが、ヴィエラは身に付けるのを何度も忘れてしまっていた。
どこに置いたままだっただろうか。
首を傾げて考えていると隊員が彼女を現実に引き戻す。
「とりあえずはシュピッツェの所に行けよ」
じゃあなと言い残し、隊員は去って行った。

隊員を見送り、言われた通りシュピッツェの所に行こうとしたところで彼女は自分が持っている荷物の存在を思い出した。これを持ったまま行くのはまずいだろうと考え、彼女は一旦テントに戻り、荷物を置く。

それからようやくシュピッツェがいるだろう簡易施設へ向かった。会議室として使われている簡易施設前に着き、入室許可を貰ってから中に入る。すると中にはシュピッツェとヴィエラと同じツヴァイであるカワムラが居た。

「お呼びだと伺いましたが、どういった用件でしょうか」

「倒れたばかりだというのに、ここまで来てもらって申し訳ない」

そう、切り出したシュピッツェは室内に設置してあるテーブルの椅子にヴィエラを座らせ、その向かいに自分も座る。

「ここに呼んだ用件だが、君に次の調査の依頼だ。アインスと共にある調査を行なってもらう」

アインス・・・ツヴァイより上位の階級だ。そのような人物と共に仕事をしろと目の前の人は言っているのか。

「ちょっと待って下さい。アインスと組んでの調査、ですか？」

ヴィエラの質問に、至極真面目に答える。

「ああ、そうだ」

その答えに、ヴィエラは思考が一瞬止まる。

ちょっと待て。

アインスは特殊部隊だ。彼らは時に己の資格を隠して保護委員会の部署に潜入したり、他の機関に潜入したりし、調査する場合もあるらしい。実際に彼らがどのような活動を行なっているのか、他の部署には全く知らされることは無い。謎の部署だ。

そんな特殊な部隊と一緒に調査をしろと言うのか。いったい何を？

「詳しい説明は本部で行われる。明朝首都へ戻るように。それじゃあ、私は現場に戻るから」

笑顔で言い残してシュピッツェは出て行った。カワムラは彼が出て行った扉を見て溜息を吐く。

「シュピッツェの言った通りだ。リーダーからの許可も下りている。お前の担当は俺が引き継ぐ」
「分かりました」
「あと、通信機ちゃんと携帯しとけ。リーダーが怒ってたぞ」
その言葉にヴィエラはやばいと顔を引きつらせた。リーダーとはツヴァイの統率者であり、アインスとまではいかないが各々好きな事をするツヴァイの変人をまとめ上げる事ができる兵(つわもの)だ。その人物が怒っているということにヴィエラは背筋に冷たいものを感じだ。
本部に帰りたくない。
この時、彼女は本気でそう思った。
「せっかく配給したのに使わなければ意味が無いとさ。ま、その通りだが。これに懲りたら忘れない事だ。ほら、通信機。処置室に置いてあったぞ」
カワムラが机にヴィエラへ支給された通信機を置く。
「以後気をつけます」
素直に反省したヴィエラを慰める様に、カワムラは彼女の頭を撫でた。
ツヴァイの資格を持つ者の多くは３０代から５０代が多い。そのせいか、まだ１０代のヴィエラは先輩たちに可愛がられている。
「じゃ、俺も仕事に戻るから。倒れたばかりだし、今日はゆっくり休めよ」
ヴィエラとカワムラは共に会議室を出て、それぞれ自分がしなければならない仕事をこなすための場所へ足を向けた。

報告書１１－新たな調査へ（２）

次の日の昼ごろヴィエラは首都にある古代遺跡及び遺産保護委員会本部に到着した。
重い体を引きずりながら、新しい調査の詳細を聞くためにリーダーのもとへ行く。長距離を短時間で移動できる乗り物を使い、首都まで戻って来たが、その乗り物がヴィエラは大の苦手である。３時間程のその旅路は彼女の精神力と体力を大きく削るには十分だった。任務がなければ自宅に戻って思う存分眠って体調を回復させたい。顔色を悪くさせながら本部内を移動していたのだが、注意力散漫になっていた彼女は進行方向に立っていた人の背中にぶつかってしまった。
「すみません」
弱々しく謝罪し、相手の顔を見る。その人物を認識したヴィエラは悲鳴を上げそうなほど驚愕した。
「あ、貴方！どうしてここに」
彼女がぶつかった人物はトレジャーハンターのシンだった。
だが、彼女を見下ろすシンは、遺跡で共に行動していた時の様に明るく生き生きとした印象とは打って変わり、感情が死んでしまったような静かな表情をしている。その表情にヴィエラは嫌悪を覚えた。
この表情は嫌な感じがする。何か思い出したくない・・・。
次の瞬間、ヴィエラはあの頭痛に襲われが、それを振り払う様に、彼女は頭を振る。
「お、もう着いたのか」
シンの前に立っていた人物がヴィエラに気づき、声をかけて来た。
「リーダー」
弱々しくヴィエラが言う。

「相変わらず乗り物に酔ったのか。任務の説明の前に医務室行って一時間休んで来い。内容が頭に入らない様じゃ仕事に支障が出る」
呆れながらリーダーはヴィエラに指示する。それをヴィエラは首を横に振って拒否した。普段なら喜んで医務室へ向かうのだが、今は目の前の状況の方が気になる。
「リーダー、この人は」
「ああ、こいつは今回の任務でのお前のパートナーだ」
返って来た答えにヴィエラは目を見開いた。
自分の記憶間違いでなければ今回の任務はアインスと一緒に組むはずだ。
目の前の無愛想な男は、昨日へらへら笑いながら自分はトレジャーハンターだと言っていたではないか。
つまり自分はアインスに騙されていた、ということなのか。
「今回のパートナーということは、この男はアインスですか？」
「ああ、この無愛想な男はアインスだ」
アインスはその特殊性から素性を隠す事がある。何らかの理由でヴィエラに正体を明かさなかったのだろう。理解は出来るが、納得のいかないヴィエラは苛立ちを感じた。
「リーダー、やっぱり気分が悪いので一時間だけ休ませて下さい」
「分かった。一時間後俺の執務室に来い」
ヴィエラはふらふらと医務室に向かって歩き始めた。
ただでさえ昨日の遺跡侵入者との接触及び戦闘などで体調が良くないというのに、急な任務変更で苦手な乗り物に乗って気分が悪くなった。その上トレジャーハンターだと思っていた人物が実はアインスだった、という衝撃的な事実を突きつけられて平静でいられる人がいるなら今の自分と変わってほしいものだ。
そう思ったのだが、耐えられそうな面々を思い浮かべる事が出来て、深いため息が出た。
「あれがヴィエラ・リーニだ」

ヴィエラに届かない程の小さな声でリーダーがシンに言う。けれど彼は無反応だ。
リーダーにとって彼がこういう態度でいる事は普通なのでヴィエラの様に驚きはしない。
「俺たちの大事な仲間で、娘の様な子だ。無茶をし過ぎるなよ」
リーダーはシンの肩を軽く叩いて去って行った。
残されたシンはその場を動かない。しばらくの間誰もいなくなった廊下に佇んでいたが、やがてどこかへ行ってしまった。

医務室に着き、在中している医師に頼んでベッドを借りた。
上着と付けていた装備を外してベッドの下に置いてある籠に入れ、ヴィエラは横にある。それだけで少し気分が良くなる。具合の悪さに身体が疲れていたのか、あっという間にヴィエラは眠りについた。
次に目が覚めた時、彼女は近くに人がいるのに気がついた。視線を天井から横に移動させると、そこにはシンがいた。
何故ここにいるのかとは問わず、彼女は寝起きの擦れた声で彼に言う。
「貴方、アインスだったんだ」
シンは静かにヴィエラを見つめる。彼からの反応を期待していたわけではないので、ヴィエラは自分の知りたいことを口にする。
「何故、私を指名したの」
「昨日起きた現場に君が居たから。それだけだ」
つまり、偶然彼に遭遇し、仮面で顔を隠した変な男性2人組にも遭遇してしまった為に自分は今回の調査を途中で外されたということか。
遺跡での遭難といい、つくづく運のない自分に溜息が洩れた。
だるい身体を起こし、ヴィエラは手で髪を整えつつベッドから降り、外していた装備と上着を身に付ける。
時間を確認すると十数分で一時間経つ。
動こうとしないシンをそのままに、ヴィエラはベッドを貸してく

れた医師に礼を言って1人で医務室を出た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3807k/

失われたものの守護者

2011年10月24日02時00分発行